

果樹試験場うめ研究所成果発表課題 要約

1. ウメのドローン施肥が肥料分布および作業性等に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 向日春輔)

ウメのドローン施肥技術の確立を目的として、効率的な散布方法と作業性の向上効果について調査を行った。効率的な散布方法として、主幹の両側 1m 上空を周回するコの字型散布が、広範囲かつ偏りなく散布できることが示唆された。高濃度窒素肥料を用いたドローン散布は、手散布より作業時間を短縮をさせ、作業の省力化に貢献すると考えられた。

2. 薬剤のドローン散布によるウメの病害防除

(うめ研究所 主任研究員 井沼崇)

近年、省力的な防除技術として、農薬のドローン散布が可能となっているが、これまでにウメの殺菌剤をドローン散布した知見はなかった。そこで、高濃度・少量散布 4 薬剤、通常濃度散布 1 薬剤について、黒星病、すす斑病に対する防除効果を検討したところ、ドローン散布による防除効果は、動力噴霧機による手散布との比較で、劣る結果となった場合もあったが、おおむね同等であった。

3. 温暖化に対応した梅干の高品質化技術の開発

(うめ研究所 主任研究員 城村徳明)

ハウス干しを行う梅干の過剰な日焼けや、果皮の赤色化を抑制するため、みなべ町現地 4 地点およびうめ研究所ハウスにおいて、60%遮光シートを利用して干し上げを行った。結果、温度の低下により干し上げ日数は 1 日程度長くなるものの、赤色化が抑制され、ハウス焼け果実の発生が少ない高品質な白干梅が干し上がることが明らかとなった。

4. ウメへの汚泥肥料施用が樹体生育および収量等に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 沼田晃千月)

肥料価格高騰のため、コストを抑えた栽培方法の確立が求められている。本研究では低価格の汚泥肥料をウメ樹へ施用した場合の肥効、収量および樹体生育に与える影響について調査した。その結果、慣行の有機配合肥料を用いた場合と同等の肥効、収量が確認され、樹勢低下も認められなかった。

5. 2024、2025 年のウメ不作の要因

(うめ研究所 研究員 道上想)

2024 年と 2025 年の開花前および開花期間中の気象条件を分析し、それぞれの年に着果数が減少した要因について検証した。その結果、2024 年は開花前の高温により開花が早まり、不完全花が増加したことで受精不良となったことが、また 2025 年は開花前に低温で推移したことで開花が短期間に集中し、さらに開花期間中にミツバチによる授粉活動が充分に行われず受粉できなかったことが要因であると考えられた。

6. クビアカツヤカミキリの早期発見に向けた取組

（西牟婁振興局農林水産振興部 副主査 伊藤友祐）

クビアカツヤカミキリの早期発見・早期対策を実現するため、情報共有や発生状況調査を円滑に進めることを目的に連絡会議を設立して、会員のクビアカツヤカミキリの理解を深めることを目的とした現地研修会や農業者を対象とした対策研修会の開催、チラシやポスターの配布による住民への啓発活動を実施した。

現在のところ西牟婁管内ではクビアカツヤカミキリの被害は確認されていない。